



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雑報. 地球 1930, 13(4): 309-317

ISSUE DATE:

1930-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183739>

RIGHT:

い、他の見る目も、ハラハラする所まで進む。叱つて置いて一度廊下へ出た先生が、も一度扉を排してつかつかとやつてくると、雷の落ち方が今一層猛烈を極める。筆者も二三回はさうした洗禮をうけた。しかしそれ程きつい先生も、實は情はこまやかであるから、事後光風舞月まことに男らしい気分は感心させる、故に叱られた、甲乙誰もが先生を悪くはいはぬあまり早く逝かれたので惜しい惜しいと思うてはや數年の今日になつた。

門下のもの共は、先生がなくなれたから、相談つて遺稿を整理し、さきに世界大戦史をだしたが、今度はこの日本中世史が世に出たのである。菊版凡一千二百頁誠に堂々たる大冊子として出版された、近頃に於て、日本史學界に於ける一大著述たりと云ふに吝ならぬものである。

本書稿を果むること凡そ三篇四十二章、その第一篇は明治三十八年に單行本になつて出で、洛陽の紙價を高からしめた日本中世史を収めてゐる、我々は本篇を讀んで、第一によくもまあこんな細麗たる美文がかけたものだと思ひするのである程、先生の「凝り性」が顯はれてゐる。先生の特に力を致された所は、時代の文化、世の移りかはり、世態の進みといふやうなことを、微を穿ち、細を果めて明快ならしめんとしられた點である。しかもよくこれに成功して、讀むものをし

て一讀巻をおく能はざらしめるのである。  
蓋し先生は資料を集めるといふよりも、資料を生かして使うことの名人であつた、机上の空論をさけて生地實體の世相を詳説せんとしられた、故に自ら先の史論には當時の地理的

事情といふものを極めて重要な因子として取扱はれた。この點に於て我々は先生に教へらるゝことが多い。本書中でも、「鎌倉時代の布教と當時の交通」「足利時代に於ける堺港」の如き、その命題からして既に歴史地理學の領分に入るのであるが「都鄙の文藝」「東山時代に於ける「精神の生活」又は「世の替り目と京都」のごとき金玉にも比すべき名文は、誠に從來の史家と類を異にし、倫を絶した見方の標本を示めされたものであつて、人文地理學者の學ぶべき所の多い論文である「日本史上の奥州」「歌謡考」「貢院の春」のごとき、いづれも人文地理の見解とみてよいものであらう。

最後に日本文化の過程、日本書紀紀事考のごときものは勿論専門歴史家の壇場であるけれども、日本の人文地理を論ぜんとする程の人ならば、いづれも一應はこれを心得ておかねばならぬ數多の教訓をもつてゐると考へる。予は本書を閲して在りし日の先生の面影を思ひ出で、叱られたことや、笑はれたことを思ひだして、停徊止む能はざるものがある。敢て本誌の餘白を汚して本書の出版を世に紹介する所以である(藤田)

## 雜 報

### ○備中成羽の植物化石層

横山博士の研究に始つた成羽の植物化石層は同博士によつて Pseudomonoceras 砂岩の上にあつて Rhætic 時代であると考へられてゐたが、近來

野外踏査の結果層序上では植物層の方が下位であることが判つて來た。最近の東洋學藝雜誌(昭和五年二月號)上には佐伯學士によりこの地方の斷面圖の一つが發表されてゐる。この地方に産する化石の種類は續々發見せられる材料によつて現在では二十種を超えてゐる。以下のものは横山博士、赤木技師、大石佐伯兩學士等發表の種類の總括である。

1. *Neocalmites carteri* A. S.
2. *Annulariopsis incipinata* O.
3. *Cladophlebis denticulata* A. S.
4. *C. halburnensis* A. S.
5. *C. nebensis* Oz. Y.
6. *Dictyophyllum remauryi* A. S. O. ?
7. *D. japonicum* S.
8. *D. sp.* O.
9. *Adiantites sp.* S.
10. *Hausmannia nairiwaense* O.
11. *Arthrophyopsis* ? sp. Y.
12. *Nilsosia inouyei* S.
13. *N. sp.* Y. S.
14. *Anomozamites sp.* S.
15. *Ctenis sp.* S.
16. *Sagenopteris sp.* Y. S.
17. *Taeniopteris sp.* S.
18. *Baiera sp.* cf. *paucipartita* O.

19. *B. sp.* O.
20. *Podozamites lanceolatus* Y. S. O. ?
21. *P. distans* A. S.
22. *Phacitopsis sp.* O.

(Y(横山) A(赤木) O(大石) S(佐伯))

本植物群は性質上からは *Rhaetic* 型であるが、然し *Rhaetic* と *Noric* の如く接近した時代の境を劃することは、植物上からは甚だ困難であつて、之に伴ふ動物化石があれば當然その助力を必要とする。故にこの植物層が(上述の植物化石採集の場所は異なる様であるが、然しその層準は大體同じである)整合的に *Pseudomonotis* 層の下位に存し、地層の轉換がなくともなるならば、而して又この *Pseudomonotis ochotica eurachis* が *Noric* の指示者であるならば、ハーンナの廣い植物としては、假令その植物群の性質が *Rhaetic* を顯示してゐても、成羽の植物層は *Noric* 時代のものである。兎に角層序古生物兩方面よりの研究がこの問題を決定する日も遠くはあるまい。(小澤)

## ○土佐の水稲二期作

「土佐はよくとこ南を受けて」

といふ土佐節の中には、其風土的特色を含み氣候溫暖なる事を示してゐる。溫和な事が俗諺に迄表はれる位であるから其の氣候を利用した農業には他より異つたものがある、昨年五月中頃同地方を歩いた時此二期作が東土佐の沿岸地方で盛に試られ最早二番田草を取つてゐるのを見た。又蔬菜類の速成

栽培がとても盛で最早二百萬貫の胡瓜、青豆等を採集して京阪神及び東京方面に送つたといふ事を聞いて土佐の人が此の氣温の爲めに受ける特典をうらやましく思つた。同縣の和田農事試験場長の高知縣の水稻の二期作に就ての論文あり其大要を抄録す。

# 一、二期作發達の経路及現状

其起原寛永年間にありと云ふが詳細は不明、明治十年前後も二三町歩の栽培あり僅かに餘脈を續いで來た。明治二十八年長岡郡十市村阿戸鍋島菊太郎が自己栽培中の早稻中より最も出穂早いのを發見し栽培したのを明治三十二年同郡稻生村宇衣笠の吉川頻次が之を貰ひ受け栽培し同年七月二十二日新米を高知市場に出し世人の注意をひき所々に栽培する様になつた。然し此が縣統計書に出た始は明治四十年以後にして、初は五町歩の栽培反別を有したが漸次盛となり、昭和三年度には其の栽培反別四千四百餘町歩に上り一市五郡四十九ヶ町村に亘つてゐる。

栽培地域は高知市以東の平野にして其の割合は香美郡四七パーセント、長岡郡三一パーセント、安藝郡一七パーセント其他は五パーセントである。故に二期作は香美、長岡二郡が大部分を占め其の地は物部川其他大小の河川の流域平坦地で水利の便亦良好である。

土佐で二期作を行つた動機は氣候關係もあらうがそれより直接の原因は麥が排水不良で出来ないから食糧に不足を感じ工夫したと云ふ事であるが今日はかかる不良排水地は殆ど二

期作は行はれてゐない。若し排水不良の地あらば普通早稻を一回栽培し三年又は四年に一回位二期作を行ふ所とある。

二期作を行ふ事により縣全體の用米増加如何と見るに縣の統計では別段變つてゐない。今假に第二回目植付の收穫高が一期待を行ふがための増收とすれば昭和三年には六萬八千石近くになる。

本縣の米年平均收穫高は六十三萬八千五百餘石であるが、其約一割弱は二期作に因る増收と考へられる。第一期作收穫は縣統計では普通作に含めてあるので別に調べられぬが縣農事試験場の成績より見れば第一期作が主で第二期作は餘得の様なものである。

## 二期作反當玄米收量 (第二表)

大正	同	昭和	同	平均
十二年	十三年	十四年	元年	二年
第一期作	二、五九	二、七五	二、四三	二、五八
第二期作	一、〇四	〇、八八	一、四〇	二、七五
普通作	二、七四	二、六五	二、六四	二、七五
第二期作平均反當收量 (第三表)				

年次	粳	糯
大正八年	一、一五四	一、〇〇〇
九年	一、二九九	一、一〇〇
十年	一、五〇〇	一、三四二
十一年	一、七五一	一、四六一
十二年	一、三三四	一、三八〇

十三年	一、二六〇	一、二五〇
十四年	一、六二七	一、七〇七
昭和元年	一、七三九	一、七六九
二年	一、六九九	一、八八二
三年	一、五三九	一、四八九
平均	一、四八七	一、四三八

然らば農家一般の第一期反當收量如何と云ふに調査なきため判らないが普通農家の云ふ所では一期、二期合せて米十俵と云ふから第三表の示す如く第二期に一石五斗の收穫あるなら第一期には二石五斗位ある事になる。

而して此が品種は第一期には衣笠といふ早稲第二期作のは晩稲が必要條件だから相川といふのをを用ひてゐる。極端に早いのと極端に晩いのをを用ふるのが條件である。

氣温と直接關係がある。品種によつて異つてゐるが高知縣の最近十ヶ年間の平均氣温は三月下旬午前十時平均C十二度十一月中旬同十四度六稻の生育は十一度以上と思はれる。此等の條件に適した衣笠は插秧後九十日で成熟し結實日數も二十七日内外でよい。單に出穂期の早いと云ふ點から見れば北海道の膽振早生、走坊主等は四月―七日と早い結實日數は衣笠より一兩日遅れる。のみならず收穫は衣笠に及ばない。

次に第二期作品種より見れば高知縣は八月月上旬にその移植をなし十一月中旬まで百日程で伸長出穂成熟と随分忙しい。

素人は短時間で實る早稲がよい様に考へるが稲は短日型の植物で光線を受ける事少く出穂期を急ぐから短日の間に成熟す

るから非常な減收となる。故に光線の不足によつて生育を急ぐ稲の歩調と移植後の稻生育可能な期間との均衡が保れなければならぬから氣温の許す範圍内に出来るだけ晩くまで生育を續け得る稲が良い。此には相川といふが最もよい。

A第一期の苗代が最も困難で攝氏十度にならぬと發芽困難である。此は最小限度が三月廿日頃である。播種後三十日位で本田に移植する、本田に移植するのは五月十日を限界とし未だ苗が小さいから深く植ゑない事が必要である。肥料は短時間に成育するのであるから速効性のものがよい。かくて六月の極雨期に一時的低溫となり減收を來すことがある。此には肥料の加減と田面に湛水する事が必要條件である。

B第二期苗代は六月下旬乃至七月上旬に始り第一期のものは正反對の條件の許に育てねばならぬ。普通第一期が出穂始の頃に二番目苗代の播付をなす。

氣温が高いから其の播種、肥料、害虫に餘程の注意が肝要又本田移植苗を多く要するから苗を十分多く育てる。

本田に移植するのは苗代日數三十日位が適當にして八月十五日以前に移植するのが最も良い。最大限界は八月廿五日頃迄である。肥料は第一期と多少異なる遅くまで肥料が効く様では成熟に影響するから注意する事は第一期と同じだが、第一期は紫雲英の窒素肥料であつたが此は大豆粕がよい。

#### 水稻二期作の經濟的考察

第二期作を研究するもの必ず其の經濟的有利か否かを知らねばならぬ。此は複雑な地理的事情と各個々の農家の經營如

に何より異なるが二期作は普通作に比して米一石當の生産費が少い。又短時間に二回の操作をやるのでよく働く。

二期作と普通作との反當收支表

収入の部

玄米收入

副収入

計

種子支出の部

肥料代(自給購入)

勞賃(自家雇人)

公租及公課

資本利子(土地資本)

永小作料

二期作 普通作

四、四九六 七、四七三

一八、四四九 二〇、三五四

二四、九一八 二八、三三三

〇、七七七 七、八四四

三、四〇五 三、九〇四

一三、元七 一七、六三

二七、三三三 四、八三三

七、三六五 一〇、八三三

二、四〇〇 一、九七四

二、八六六 一、〇〇〇

備考

反當收量二期作三石△〇 普通作二石△一

反當收量二期作三石△〇 普通作二石△一

反當收量二期作三石△〇 普通作二石△一

反當收量二期作三石△〇 普通作二石△一

反當收量二期作三石△〇 普通作二石△一

反當收量二期作三石△〇 普通作二石△一

反當收量二期作三石△〇 普通作二石△一

反當收量二期作三石△〇 普通作二石△一

反當收量二期作三石△〇 普通作二石△一

反當收量二期作三石△〇 普通作二石△一

小作料 一三、一五五 一、二七〇  
農舍費 三、七六九 四、三七五  
農具費 三、三六八 三、二六五  
諸材料費 二、三六九 一、七七七  
計 一三、九八八 八、六八九

反當玄米生産費 九、四四九 七、五五五

玄米一石宛生産費 二五、二四四 三、四九五

支出の計より、副収入を引いたもの

(吉田)

○我國製鐵界の現状と其の將來

總ての工業の原動力をなす鐵は我國に於て不幸にして其の天恵に浴する事尠く過半數は此を輸入により漸く其の需要を満してゐるに過ぎない。爲に我國産業發展は勿論、軍備其他に影響する所極めて甚大、此が對策は上下、官民等しく苦心してゐる所である。左に示すものは横堀博士の論文を抄書したものである。現在我國に輸入せらるる鐵鐵、洗鐵、鋼材等は三年に於て合計一億圓に達し、更に機械及び鐵加工品等の輸入一億五千萬圓、合計二億五千萬圓以上に達してゐる。昭和元年後三ヶ年間の輸入狀態を示すと左表の通りである。

昭和元年	鐵鐵	屑鐵、故鐵	銑鐵	鋼片等	鋼材
同二年	七、九三三、九七六	二、九三〇、八四四	一八、四九三、八六六	二、三三六、七四四	一四、九八一、六三三
同三年	一〇、一五八、一〇一	八、五三三、七四七	二二、九六六、六〇〇	五、九六六、九四四	一〇、〇五二、九六六
同三年	一七、七九二、〇九	一三、三六六、八〇七	二六、〇七五、二五九	七、二二五、五五二	一〇、六〇三、三三七

	鐵鋼製品	其自動車内	同石油機關	縫衣機	同紡績機械	發電機	金屬及木工機械
昭和元年	九、六〇、〇〇〇圓	一五、七三、〇〇〇	四、三九八、三五四	三、六〇、〇〇〇	八、二六、七五五	一〇、六〇、〇五三	三、〇四、五七五
同二年	八、二七、〇〇〇圓	一八、二六、七五五	五、〇九〇、七三三	六、五三、二六三	一〇、一〇四、七五三	七、〇〇〇、〇〇七	四、六五、八七五
同三年	一一、二五、〇〇〇圓	二二、二四、八三三	二、八二四、二七七	五、二四二、八四四	一〇、四三三、〇七七	六、四六、七三三	四、三六、八六八

而して右順當平均價は昭和三年に於て鐵鐵九圓六十二錢屑鐵及故鐵三十六圓、洗鐵四十五圓、銅片及塊條七十九圓、鋼材百二十九圓で加工製作品は價一定しないが大體千五百圓乃至二千五百圓である。

一、鐵 鐵

支那及南洋植民地から輸入するのは元通り繼續輸入し内地產鐵鐵の増産と硫化鐵鐵の處理法により安價なる製鐵資源を求む。

二、屑鐵及故鐵

海外より輸入の他なし

三、銑 鐵

昭和三年我國銑鐵產額は滿鮮も合せて一、五四〇、四六一噸輸入は五七二、八〇二噸なれば我國の需用高は約二百十萬噸である、假に昭和九年度に於て二百五十萬噸の銑鐵需用額に達するものとして我國現時の製鐵能力を見るに昭和三年末現在商工省鐵山局調査によると左表の通りである。

實產額二年度

八幡製鐵所	四六五、八〇〇噸	七三五、〇〇〇噸
釜石鐵山製鐵所	一五六、四〇〇	六八、〇〇〇
淺野造船所	五一、〇〇〇	二二、〇〇〇
日本製鋼所	一七〇、〇〇〇	九二、〇〇〇
兼二浦製鐵所	一〇二、〇〇〇	一二九、〇〇〇
本溪湖公司	八八、四〇〇	五一、〇〇〇
鞍山製鐵所	一七〇、〇〇〇	一一三、〇〇〇
計	一、三八〇、四〇〇	

滿鮮も合せて全銑鐵製造能力は二百萬噸に達する事は出來得るから殘額五十萬噸を輸入とすれば約二千萬圓、製銑増額とすれば二千二百萬圓程度なり。

四、鋼

昭和三年我國需用鋼鐵總量は約二百八十萬噸にして昭和九年度に我國鋼材需用額三百萬噸に達するとして現時の製鋼能力を見るに（昭和三年末）

八幡製鐵所	一、〇八七、五〇〇 噸
釜石鐵山製鐵所	七五、〇〇〇
日本製鋼所	二二三、七五〇
淺野製鐵部	七五、〇〇〇
日本鋼管會社	一七六、二五〇
川崎車輪會社	三三、七五〇
川崎造船所	一五〇、〇〇〇
神戸製鋼所	八一、〇〇〇
九州製鋼所	一一二、五〇〇
住友製鋼所	四九、五〇〇
住友尼崎工場	五六、二五〇
小倉製鋼所	五六、二五〇
富士製鋼會社	四五、〇〇〇
大島製鋼所	四一、二五〇
三菱茂里工場	四一、二五〇
大阪製鐵會社	五六、二五〇
東京鋼材會社	一五、〇〇〇
羽室鑄鋼所	一二、〇〇〇
唐津製鋼所	七、五〇〇
釜二浦製鐵所	一一二、五〇〇

合計一ヶ年生産能力  
 力二、五一二、五〇〇 噸

にして現在の設備を完全にすれば國家需用全額二百五十萬噸は幸じて供給可能と見られてゐるが、其工場設備改善せざれば望しい。然るに其に多額の資金を要するから政府の低利

資金貸付に待つべく更に不足額五十萬噸は輸入とすれば其金高五千萬圓製鋼能力を増大し、自給とすれば資金六千五百萬圓見當を要す。

#### 五、加工製品

年額一億圓の輸入を見る、此は畢竟我國製鐵能力の如何に關する問題で自動車及機械類の工業製品を自國內にて製造せねばならぬ。此がために政府の保護獎勵を講ぜられねばならぬ。

#### ○オランダのK・M・L航空會社 一九一九年夏

アムステルダムに航空博覽會が開かれたために、刺激をうけて同年十二月ハীগにこの會社が出来、翌年五月から事業開始となり、ロンドン間に定期航空路が出来、最初は隔日であつたが、ついで一日一回又二回となり、今では最も古い航空路になつた、この會社の連絡を見ると一九二八年左の如くであつた。

	アムステルダム	ロンドン	一日	四回	五、〇二六	旅客數
同	—	パリ	同	三回	四、四三〇	
同	—	ブラツセル	同	三回	—	
同	—	アントワープ	同	一回	—	
同	—	ハーゼル・チューリツヒ	同	一回	六七二	
同	—	ハノーバー、ベルリン	同	一回	—	
同	—	ハンブルグ	同	三回	七三六	



同	ハンブルグ—コペンハーゲン	同	二回	二、一二八
同	マルメ	同	二回	—
同	ルール地方—南獨逸	同	二回	—
同	カッセル—マリンバード	同	一回	—
同	ブラーグ—ビエンナ	同	一回	—
同	パリ—リヨン—マルセイユ	同	一回	—

上記の旅客の外に貨物としては花卉、果實、野菜、新聞紙、肉類及各種の腐敗しやすいもの、ラザオ機械、自動車部分品、工藝品、裝飾品、繪畫、同額縁、動物、並各種見本である、オランダの園藝はこの迅速なる空中輸送に於て成功し三〇八、〇〇〇疋の花弁が送られ、主として切花が發送された萼の輸送にも適する。

中にもロンドン線は最も良好な成績を収め世界の飛行路中でロンドン、アムステルダムの中聯絡は平凡な方法になつた、チューリップや温室葎はこれによつてのみ英國に送られた。

パリ、ブラッセル、ハムブルグ線は、フランスのフアールマン會社と競争してゐる、ハムブルグ、マルメ線は瑞典のスホルト會社と提携し、又ドイツのルフトハンザ會社と共同でブレーメン、ハムブルグに達せんとしてゐる。

目下アムステルダムと東洋のバタヴィヤの間に飛行を計畫し一九二八年に最初の飛行をやつた、二九年及三〇年は、この航路の試験に費やす差である、但し和蘭のこの會社のみでなく、歐洲各國の航空事業は日を逐ふて目醒しく發達し各國

政府は之を補助すること亦至れりといふべき現状であるからK、L、Mの前途は幾多の困難があるであらう。

猶同社がノオツカー機使用以來、航空が規則的に行はれ、且安全なる航行が出来るやうになつたことを特記しておかねばならぬ。

### ○イタリーの米食宣傳

近時伊太利政府は小麥の増收及耕地の増加につとむると同時に米作の改良に熱中しだした元來伊國は歐洲中で米產國として知られてゐるにも不拘、國民の食用する度は他の歐洲諸國よりも遙に少い、羅馬以南の伊人中會て米の味を知らぬものが多い。伊國の多數の勞働者はマカロニー及スパゲットの麵類であるが、その一疋の價は三利で約六人前しかない、しかし米は營養が高いにも不拘その一疋は僅に一利七十山で而も十人前の食料となるの利がある、しかるにその消費額は人口一人當一年僅に四疋で、麵類の百八十二疋に比して殆ど問題にならぬ。

しかるに一方米の産額は近年大に進み北部伊太利のトリノミラン、ベネチア諸州から平均五六百萬石を產出する、其作付反別は千四萬二千八十町に達し、一反歩の收穫は三石三斗から、昨年の四石六斗に増加した、しかるに輸出は二百萬石にすぎないから國內の米價下落して、耕作が引き合はぬやうになつてゐる。但し目下米を輸出して一ヶ年三億乃至四億利を得てゐるのであるが、將來は三百萬石まで國內で消費するやうに努力し、マカロニーの代りにせやうと一生懸命である

我國の米作を見ると一反歩は到底この數字に達しない、我等も米増收戰を講じなくてはならぬであらう。

### ○太平洋橫斷定期航空路計畫

昨年十月二十九日發

行のヘラルド、トリビューンによれば米國の太平洋橫斷航空路の開設計畫は漸次具體化し、愈々米國西岸加州南部の地點(未定)より布哇經由ヒリツピン、マニラに至る定期航空路を一九三二年迄に開き、一九三三年中に完成する豫定が出来たらしく、之に使用する四隻の飛行船は、目下オハイオ州アクロン飛行機工場につくられむとする米國海軍航空船Z、R、S、第四號及第五號又は英國のR一〇一號よりも大きく、長さ八百呎瓦斯六百五十萬立方呎(獨逸ゼペリン號は三百七十萬立方呎、英國R一〇一號は五百萬立方呎也)。

乗客八十名貨物十噸をつみこめる設計で、建設費一隻四百萬弗に達す、さしあたり米國布哇間往航一日半、復航二日を要し、比律賓へは約一週間を要する豫定なるが、グアム島には定期寄港せずとも、マストは立てるらしいと報じたけれども、且下米國政府と協議中なる由にて愈出来るかどうかは儘かでない。但し有力な四會社が合同してその準備にかゝつたことは事實である。

### 質疑應答

【問】高等科教員檢定試験の注意

【答】文部省は本年六月中に東京に於て、高等科教員檢定

質疑應答

を行ふことになつた。

地理の試験は左の範圍にて行はれる。

イ、地理學史及研究法

ロ、數理地理學(天文學地圖學等を包む)

ハ、地文學(氣象學、氣候學、海洋學、湖沼學、地質學、地形學、生物地理學を含む)

ホ、人文地理學(政治地理學、經濟地理學、人種學を含む)

ホ、地方誌(日本地誌、世界地誌を含む)

### 參考書

H. Wagner : Lehrbuch der Geographie.

H. R. Mill : The International Geography.

S. Günther : Handbuch der Mathematischen Geographie.

C. A. Young : A Text-book of General Astronomy.

W. M. Davis : Elementary Meteorology.

J. Murray and J. Hjort : The Depths of the Ocean.

O. Krümmel : Handbuch der Ozeanographie

L. V. Pirsson and Schuchert : Text book der Geology.

E. Kayser : Abriss der allgemeinen und Straigraphischen Geologie.

W. M. Davis and Braun : Grundzüge der Physiogeographie.

R. S. Tarr : College physiography.

A. R. Wallace : Island Life.

三二 八一